

## 研究コース2（レビュー指摘の伝達チーム）

### 指摘を前向きに受け止めてもらうためのレビュー手法提案

#### ～RCS法（レビューコミュニケーションスタイル手法）の提案～

研究員 : 弦間 健（株式会社インテック）  
: 辻村 隆二（株式会社日立ソリューションズ・クリエイト）  
: 伊藤 修司（SCSK株式会社）  
主査 : 中谷 一樹（TIS株式会社）  
副主査 : 上田 裕之（株式会社DTSインサイト）  
アドバイザー : 安達 賢二（株式会社HBA）

#### 研究概要

本論文ではレビューアが指摘した意図や期待が伝わらず、レビューアの期待した通りに指摘内容が成果物に反映されない問題を解決した研究について述べる。

レビュー時に検出した指摘、及びアドバイスが成果物に反映されない、類似の指摘を埋め込んでしまうという問題について、その理由を「レビューアのコミュニケーションの癖や好む表現方法で作成者へ指摘を伝えている」および「作成者が好む言い回しや考え方を意識せずに伝える」の2点と考え、対策として「RCS法（レビューコミュニケーションスタイル手法）」を構築した。

本手法によりレビューア自身のコミュニケーションスタイルの理解、また作成者のコミュニケーションスタイルに応じた指摘の伝え方を支援する仕組みを確立した。本研究では、RCS法を用いることで課題が改善されるかについて、研究員による簡易実験と研究員各社のプロジェクトでアンケート調査を実施し、検証した結果、レビューアが作成者のコミュニケーションスタイルに合わせて、指摘の伝え方を変えると、作成者が期待する行動を取るといふ分析結果を得た。

#### 1. はじめに

レビューにて検出した指摘の意図や期待がお互いに伝わらず、作成者が納得しないまま対応を進めることで、指摘の修正に抜け漏れや誤りが発生する課題がある(表1)。本課題を解決するために「RCS法」を構築し、研究員による簡易実験と各社でアンケートを取得した結果により有効性を確認した。

以降、2章では指摘の伝え方による現状課題を解決するために提案した「RCS法」の説明と期待効果について述べる。3章ではRCS法を用いたレビュー手法の有効性を検証するために各社で試行し、アンケートを取った結果を述べる。4章では検証結果を受けて、レビューの現状課題がRCS法を用いたレビュー手法により解決できたのかどうかについて考察する。最後に5章では研究成果のまとめと今後の実践に向けた展開について述べる。

表1 指摘の意図や期待が伝わらず、指摘の修正に抜け漏れや誤りが発生する課題

立場	問題	当事者達の声
レビューア	作成者に指摘の意図や期待が伝わらない。	指摘したところを指摘したとおりにしか修正してもらえない
		指摘を横展開して類似箇所のバグを自発的に検出してほしい
作成者	レビューアの指摘の意図や期待が分からない。	もっと具体的に指摘してほしいのに、抽象的にしか言ってくれない
		そこまで言われなくてもわかっているのに、事細かに指摘される

#### 1.1 解決すべき課題

表1の課題の中で、我々は、「もっと具体的に指摘してほしいのに、抽象的にしか言ってくれない」と「そこまで言われなくてもわかっているのに、事細かに指摘される」といっ

た正反対の声があることに着目した。指摘の意図や期待が伝わらない課題の根本には、レビューアと作成者自身が持つ価値観や考え方の違いがあり、各自の価値観や考え方に沿わない伝え方をしたときに、課題が顕在化するのではないかとという仮説を立てた。

すなわち、レビューアは作成者のコミュニケーションスタイルに合わせて、指摘内容の話し方や伝える順番を変えると、作成者が指摘を前向きに受け止めて期待する行動を取ってくれるようになるのではないかと考えた。

## 1.2 先行研究

1.1章の中で「レビューアが作成者のコミュニケーションスタイルに合わせて、指摘の伝え方を変えると、作成者が期待する行動を取る」という仮説を立てた。「プロジェクトの計画や特性」「成果物の特性や理解度」「担当者のスキル」に焦点をあてた研究や、指摘の伝え方の重要性を強調する文献<sup>[1]</sup>は過去にもあったが、「コミュニケーションスタイル」に着目した研究はなかった(表2)。今回我々は、「コミュニケーションスタイル」に課題解決の鍵があると考えた。

表2 本研究に関連する先行研究

先行研究	概要	調査結果
RFR法 <sup>[2]</sup>	レビュー指摘の伝達において作成者の抵抗感を軽減する手法として、問診票によるプロジェクト情報の収集やフィードバックテクニックを提案	抵抗感が発生する理由として、レビューアと作成者の信頼関係を構築する点に着目しているが、レビューアと作成者の考え方やコミュニケーションスタイルには言及していない

## 1.3 レビューにおける指摘の伝え方に対する意識の検証

1.1章で上げた問題について、現状を把握するために、レビューにおける指摘の伝え方に対する意識について、実際のソフトウェア開発の現場でアンケートを実施した。アンケートの対象と方式は以下のとおり。

(1)アンケートの対象:ソフトウェア開発の現場でレビューを実施するレビューアもしくは作成者(3社、約40名)を対象とした。回答者の内訳は(付録1)の通り。

(2)アンケートの方式:それぞれの設問に対して、「1.よくある」から「5.まったくない」までの5段階の定量評価と、回答理由についての定性コメントによる評価とした。

## 1.4 レビューにおける指摘の伝え方に対する意識のアンケート結果

アンケートの結果を図1に示す。設問1~3いずれも、70%以上が指摘の伝え方を重要と考えており、実際に、指摘の伝え方を工夫していることが分かった。

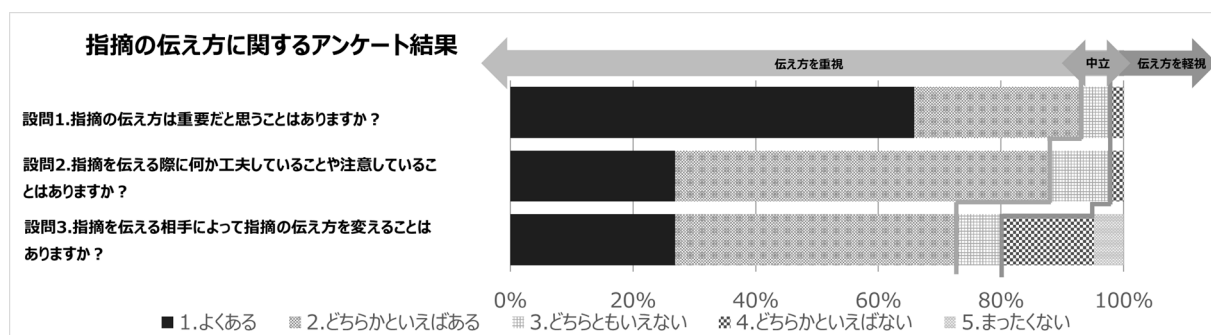


図1 指摘の伝え方に対する意識の定量項目アンケート結果

設問1~3について、回答者のコメントから傾向を分析した。設問ごとの傾向を表3に示す。各設問に対する回答とコメントの詳細は(付録2, 3)の通り。

レビュー指摘を作成者に納得してもらうためには、レビューアと作成者のスキルや成果物への理解度だけでなく、レビュー中の指摘の伝え方も重要で、実際にレビューアは自らの経験を元にして伝え方に様々な工夫をしているということが分かった。

一方で、相手のコミュニケーションスタイルに着目して伝え方を変えているという意見はなく、本研究の提案に意義があることを確認した。

表3 指摘の伝え方に対する意識の定性項目アンケート結果

設問	立場	コメント内容	回答数
1. 指摘の伝え方は重要だと思うことはありますか？	重視	伝え方が悪いと、レビューアと作成者の認識が合わない。誤った判断のまま修正してしまうので対応が期待と違うことが多い。	5名
		相手のスキルや理解度、性格に合わせて伝え方を変えないと、意図したとおりに伝わらない。	4名
		なぜ指摘するのか、作成者が納得しないと期待通りに修正されない。	3名
2. 指摘を伝える際に工夫していることや注意していることはありますか？	重視	なぜそのように考えたのか、本来はどう考えて欲しいかを伝える。	5名
		作成者のスキルや理解度、性格に合わせて、具体的に細かく指摘もしくは、指摘の背景だけ伝えて考えてもらう等を使い分けている。	3名
		作成者の性格や熟練度に合わせて、口調や言い回しを変える。	2名
3. 指摘を伝える相手によって指摘の伝え方を変えることはありますか？	重視	相手のスキルや理解度、性格に合わせて指摘の粒度を変える。初めてレビューする相手の場合は特に注意する。	4名
		相手のスキルや性格を鑑みて、伝え方に強弱をつける。対面だけでは足りないと考える場合は文書にも残す。	2名

## 2. 提案

### 2.1 コミュニケーションスタイルとは

伝え方の工夫は、レビューアの経験に基づくものであり、その効果にはばらつきがあり、他のレビューアでは再現できない。そこで、各研究員の経験則、ならびに研究員各社でヒアリングし分析した結果、「コミュニケーションスタイル」で定義されているコミュニケーション特性が調査結果の傾向をよく表していることが判明し、この特性を鑑み課題解決を試みることにした。

本論文でのコミュニケーションスタイルとは、コーチングで用いられる技法<sup>[3]</sup>を参考にし、「多様性（違い）とその対応を知る」「伝達の工夫のヒントを得る」ことを目的としている。自分、他人のタイプを認識し相互のコミュニケーションを行うことで、メンバー間の関係性向上やチーム全体のパフォーマンス向上が期待できる。

コミュニケーションスタイルは、自己タイプの認識、他者タイプを推察するために、我々の研究においては、分かりやすさを重視して4象限に分けた。各々のコミュニケーションスタイルに対して特徴があり、そのスタイル毎に「得意(OK)」「苦手(NG)」の傾向を定義している。「a」では決断が早く論理派、「b」は決断が早く感情派、「c」は決断が遅く論理派、「d」は決断が遅く感情派として分類されている。ただし、仕事やプライベート、その状況によって個人が実践するスタイルが変わるため、その個人に対してコミュニケーションスタイルの傾向を押し付けることはせず、柔軟な対応が必要である(表4参照)。

表4 4象限に分割したコミュニケーションスタイルとその特徴

スタイル	特徴	このスタイルが望むパターン		このスタイルが望まないパターン	
A	<b>決断が早く 論理派</b> ・成果が大事 ・自分で決めたい	・結論から ・単刀直入	・はっきりと ・指示したい	・回りくどい ・指示される	・細かい
B	<b>決断が早く 感情派</b> ・楽しいが大事 ・創造的 ・皆で決めたい	・楽しく ・活発	・認められる ・おおまか	・否定的 ・反応がない	・細かい ・のりが悪い
C	<b>決断が遅く 論理派</b> ・正確が大事 ・考える時間 ・自分のペース	・根拠 ・論理的	・具体的に (5W1H) ・正確に	・曖昧 ・適当	・根拠がない
D	<b>決断が遅く 感情派</b> ・善い ・役に立ちたい ・調和	・前置き ・丁寧	・優しい調子 ・ソフト	・威圧的 ・構ってもらえない	・対立

## 2.2 RCS法(レビューコミュニケーションスタイル手法)の提案

本研究では、作成者とレビューア間の「伝達」が適切に行われることを目的として、指摘事項や観点の認識齟齬を払拭し、効率的なレビューを行う手法として RCS法(Review Communication Style)を提案する。

RCS法とは、レビューに前述の「コミュニケーションスタイル」の方針を取り込むことで、作成者とレビューア間の「伝達」に変化を促す手法である。レビューアは作成者の説明を適切に理解することができ、作成者は指摘の意図や期待を前向きに受け止めて、行動することで、指摘の取り込み漏れを防ぐことができると考える。

## 2.3 RCS法の説明と導出方法

コミュニケーションスタイルで設定されている4つのスタイルをRCS法にも適用する。RCS法独自の特徴を導出するため、研究員の過去経験則に基づき、RCS法の特徴を考案した(表5)。

表5 RCS法の種類と特徴、希望スタイル

	RCSの種類	意味	RCSの特徴と作成者が望むスタイル
a	デジジョンRCS	決定, 決心, 決断	理解が早い, 指摘や説明がブレない, 大きな問題に気づく ・細かい「欠陥」を並べるのではなく, 結局どうなのかという「結果」を ・「キレる」のではなく, 「切れ」のある指摘を
b	クリエイティブRCS	創造的, 独創的	型にはまらない, 特殊なケースに気づき, 指摘や説明で細かいことは言わない ・「前置き」はいいから, 「前向きに」 ・「は~そう」ですと流されるのではなく, 新たな「発想」を引き出す
c	ロジカルRCS	論理的	論理矛盾や抜け漏れに気づき指摘や説明ができ, 複雑な内容を見ることができる ・指摘「オンリー」だけではなく, 「論理」的な説明を ・「わからない」だけでなく, 指摘する「理由(わけ)」を
d	エモーションRCS	情緒, 感動	不明確や曖昧さに気づく, 細かい誤りに気づく, 相手目線で指摘や説明ができる ・「重いヤリ」ではなく, 「思いやり」を持って ・損得「勘定」ではなく, 受け手の「感情」を考えて

各スタイルの特徴から、より具体性をもたせるため「レビューアからどのように伝達(指摘して)欲しいか」「作成者からどのように説明して欲しいか」を観点に、研究員各社にてヒアリングの実施、各種文献<sup>[4][5]</sup>を参考にレビュー戦略を策定した(図2)。具体性が向上したことで、レビュー戦略が明確になり、より実践的な手法へと導くことが可能となる。



図2 RCS法のレビュー戦略

## 2.4 RCS法を用いたレビュー手法

RCS法によるレビュー手法を図3に示す。

(1)レビューア、作成者が「RCS判定質問」に回答し(表6)、RCS決定表を使いスタイルの分類を行う(表7)。その際、レビューア、作成者がどのスタイルに分類されたか開示する。

表6 RCS判定質問事項

	質問	回答(Y or N)
①	論理的にきめることが多いか	
②	物事を決めるのは早いほうか	

表7 RCS決定表

	RCSの種類	回答①	回答②
a	デシジョンRCS	Y	Y
b	クリエイティブRCS	N	Y
c	ロジカルRCS	Y	N
d	エモーションRCS	N	N

### (2)RCSと留意事項の確認

レビューを実施する際に相手がどのスタイルに属するか確認し、図2の留意事項を確認する。

### (3)特徴と留意点を鑑みたレビュー実施

例えばレビューアは作成者の特性から、具体的、且つ詳細な指摘(デシジョンRCS、ロジカルRCS、エモーションRCS)をする、否定的な言い方をせずに良い点から発言する(クリエイティブRCS)等、RCSの特徴を意識したレビューを行う。

### (4)レビュー中スタイル変化の対応

レビューアは初めに判定した作成者のRCSの傾向にない、もしくはRCSに変更が生じたと判断した場合、その傾向に基づきRCS決定表から対応方針を変更する。

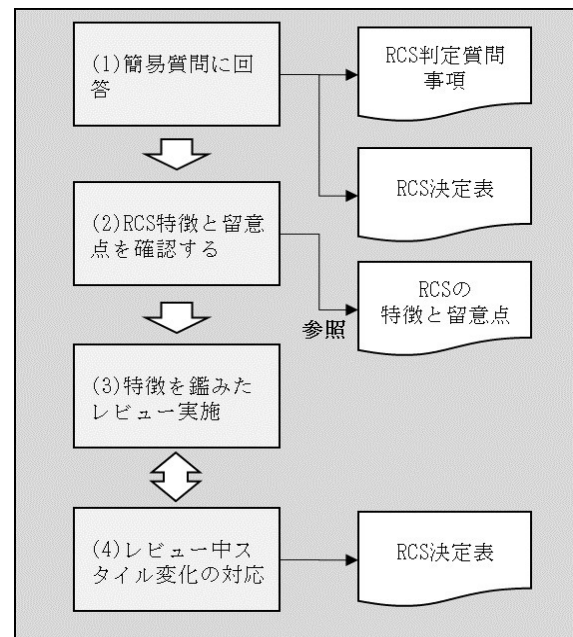


図3 RCSによるレビュー手法

## 2.5 手法の応用

RCS法を適用することで、作成者が指摘を前向きに受け止め、レビューアの期待に則した行動を可能とするが、常に最適な状況下でレビューができるとは限らない。例えばプロジェクトが逼迫している状況においては、指摘への理解よりも対処最優先のレビューになる傾向がある。また、その時の感情によりレビュー中にスタイルが変化することもある。RCS法を十分に発揮させるためには、その様々な状況に対して臨機応変に対応をすることが重要である。以下に留意すべき事案の対応方針について提案する。

### (1)プロジェクトが逼迫している場合

プロジェクトが逼迫している場合、スピードを意識した対応が求められる。そのため、図2の各スタイルに対し、プロジェクトが逼迫している場合の施策を研究員の経験則に基づき考案した。

各スタイルの主な特徴としては、デシジョンRCS、クリエイティブRCSは決断が早い傾向にあることから、逼迫している状況であっても比較的対処が可能である。逆にロジカルRCS、エモーションRCSは決断が遅い傾向にあることから、スピードを鑑みた施策が必要となってくる。時間的に逼迫している場合は、デシジョンRCS、

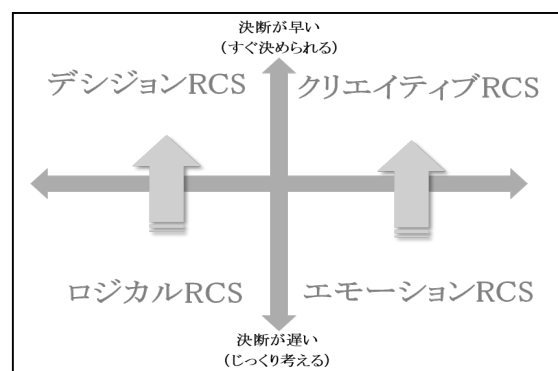


図4 逼迫時の対応方針

クリエイティブ RCS の対応を鑑みた行動をすることで、対処可能な状況になると考える (図 4)。逼迫時の具体的施策を (付録 4) に示す。

また、逼迫している場合、レビューアは効率的にレビューを進めようとするところから、デジジョン RCS の傾向になる。その場合、要点に絞った指摘が多くなることから、作成者が具体的な修正内容を求めている場合、レビューアが期待する修正内容とならない可能性がある。そのため、修正内容が明確になっているかレビューの中で確認する必要がある。

### (2) 立場、役割を鑑みたスタイルの検討

人間は常に同じ感情、同じ性格を保ち行動するとは限らない。その環境、状況、もしくは発言内容によって感情の変化が生じる可能性もある。RCS 法も状況に応じた対応の切り替えが求められる。RCS 法は、作成者、レビューアに対して予め RCS の分類を行うが、レビューの状況からスタイルの再分類を行うことでレビューの最適化が期待できる。

研究員の過去の経験上、作成者が先輩や上司、顧客といったレビューアよりも立場や役割が上位の場合、レビューアの指摘内容や対応の仕方によっては、作成者の感情によりレビュー前に判定した RCS と相違する場合がある。立場や役割が上位の作成者は、デジジョン RCS にシフトする傾向にあることから、レビューアは予めデジジョン RCS の傾向に基づいた対応を行うと、円滑なレビューの実現が期待できる (付録 5)。

## 3. 実験 (RCS 法を用いたレビュー手法の有効性検証)

### 3.1 RCS 法の実験

2 章で提案した RCS 法を、研究員 3 名の論文レビューで実践した。具体的な実験方法は以下のとおり。

(1) レビュー対象：論文本紙の各担当箇所相互レビューを研究員 3 名、非対面で実施。レビューアは、A. 作成者の RCS を意識しない指摘 (以下、従来法) と B. 作成者の RCS を意識した指摘 (以下、RCS 法) の 2 種類を挙げて、作成者がどちらの指摘に納得できたかを「1. A の方が高い」、「2. A も B も同じ」、「3. B の方が高い」の 3 段階評価と、評価理由についてコメントによる評価とした。

### 3.2 RCS 法の実験結果

実験結果を図 5～6 と表 8～9 に示す。RCS 法を適用した指摘の方が、作成者にとって、納得度の高い結果となった (図 5)。また、指摘の優先度に着目して分類すると、優先度の高い指摘よりも、優先度が中程度の方が、RCS 法の効果が大きい結果となった (図 6)。これは、優先度の高い指摘は、伝え方がどうあれ対応せざるを得ないが、優先度中の指摘は、対応にいくつかの選択肢があり、相談や調整が必要な指摘であることが多いからである。実験で、指摘の伝え方で作成者の納得度に差がでるということを確認した。

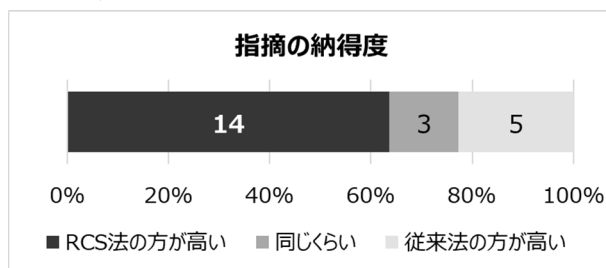


図 5 指摘の納得度

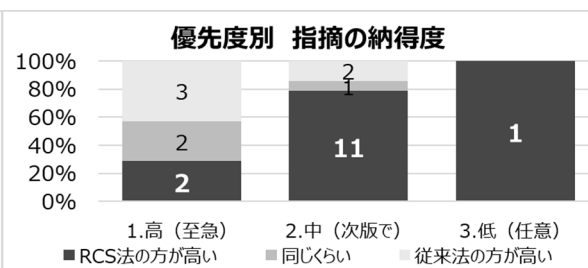


図 6 優先度別指摘の納得度

指摘の納得度を選択した理由を表 8 に示す。詳細は (付録 6) の通り。RCS 法の方が、納得度が高いと評価した理由は、作成者の RCS と指摘の重要度・優先度を意識して、指摘を伝えた結果である。

一方で、従来法の方が、納得度が高いと評価した理由は、作成者の RCS に合わない指摘

(具体性を重視する相手に、背景や理由を重視) や、RCS 法を意識するあまり、修正方針が不明瞭になった(指摘内容が簡潔すぎる、抽象的すぎる)ためであった。

補足として、RCS 法適用による指摘量(文字数)の増減と納得度の相関関係を(付録 7)に示す。RCS 法を意識しすぎると、指摘内容の欠落や、指摘が不明瞭、局所化することがあり、納得度が下がることを確認した。これらは、RCS 法を適用する際の注意点である。

表 8 指摘の納得度を選択した理由

納得度	評価理由	回答数
従来法の方が高い	従来法の方が、具体的で修正イメージが湧きやすい。	2 件
	RCS 法の指摘がピンポイントすぎる。類似見直しが不足する可能性がある。	2 件
	RCS 法の指摘が間接的で、修正要否の見極めが困難。	1 件
同じくらい	RCS 法、従来法どちらの指摘も表現が違っただけで同じ趣旨の指摘だと解釈できる。	3 件
RCS 法の方が高い	従来法の指摘が簡潔すぎて、追加で質問しないと意図が分からない。	6 件
	RCS 法の方が、指摘の理由が明確で対応を検討しやすい。共感できる。	3 件
	RCS 法の方が、具体的で対応しやすい。客観的に伝えようとしてくれている。	2 件

### 3.3 RCS 法が実際に現場で適用可能かのアンケート

実験が限定的であったため、1.3 と同じ対象者に、RCS 法の有効性について、アンケートを実施した。アンケート結果を図 7 に示す。

設問 1 は、RCS の診断結果が回答者の感覚と一致しているかを問う設問である。約 60% の回答者が、感覚とあっていると回答した。

設問 2 は、RCS がソフトウェア開発レビューに有効かを問う設問である。約 80% の回答者が手法に対して肯定的な見解を示した。

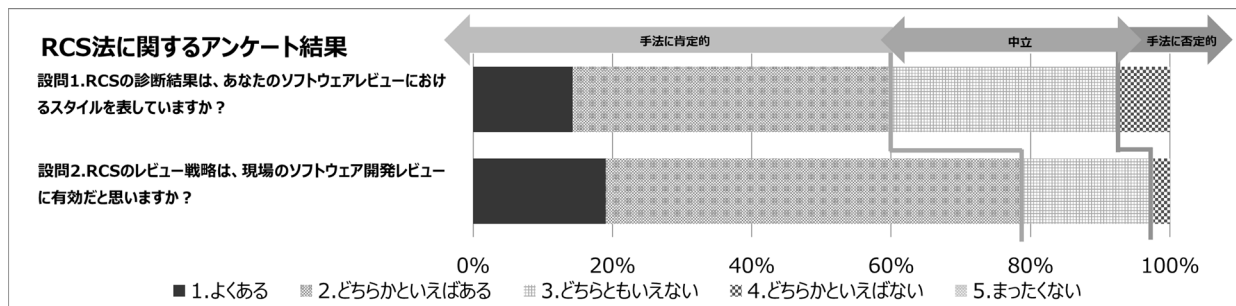


図 7 RCS 法の定量項目アンケート結果

設問 1~2 について回答者のコメントから傾向を分析した。設問ごとの傾向を表 9 に示す。各設問に対する回答とコメントの詳細は(付録 8)の通り。

表 9 RCS 法の定性項目アンケート結果

設問	立場	コメント内容	回答数
1. RCS の診断結果は、あなたのソフトウェアレビューにおけるスタイルを表していますか？	肯定	概ね当てはまる。身に覚えがある。自分の特徴を表している。	3 名
	肯定	特徴のすべてが該当するとは言えないが、言われてみれば確かにと思う内容。	3 名
	中立	レビューの種類や状況やレビューアの立場、レビューアと作成者の関係によってコミュニケーションスタイルが変わるため一概には言えない。	3 名
2. RCS のレビュー戦略は、現場のソフトウェア開発レビューに有効だと思いますか？	肯定	自己評価だけでは何とも言えない。	1 名
	肯定	レビューの相手に合わせて、伝え方や受け止め方を考え、変えるという点では有効。結果的にレビューの効率上がる可能性が高い。	5 名
	肯定	人により得意なタイプと苦手なタイプがあるので、戦略として有効。	3 名
3. RCS について質問や要望、アドバイスをお願いします	肯定	顧客とのコミュニケーション、社内の人間関係の改善にも応用できそう。	2 名
	肯定	レビューで複数のスタイルのメンバーを組み合わせると品質向上に寄与するかもしれない。チームビルディングにも有効。	1 名
	改善	自己診断と他社診断の組み合わせで診断すると、より納得度が高まる。	1 名
	改善	成果物への理解度、対象業務の得意不得意もスタイルに大きく影響する。	1 名
	改善	戦略について言葉のニュアンスが伝わりにくいところがある。	1 名

## 4. 考察

### 4.1 RCS 法の実現可能性の考察

3章の実験結果とアンケート結果より、RCS法を使うと、レビューアが作成者のコミュニケーションスタイルを意識して指摘を伝え、作成者は、指摘の意図や期待を適切にとらえて前向きに行動し、お互いが納得したうえで成果物を修正することができるのではないかという大きな可能性を感じた。

一方で、実験では、RCSを意識しすぎて、指摘内容が伝わらなくなるケースも散見された。RCS法を誤って使った例といえる。また、簡易診断としたために、RCSは固定であると誤解を招く危険があることが分かった。状況に合わせて動的にRCSを変化させていくという点を、改めて強調したい。手法の分かりやすさを重視して、今回の実験では説明を省略したが、現場で活用するためには、この点の改善が欠かせないことが分かった。

## 4.2 RCS法の副次的効果と更なる応用に関する考察

3章のRCSの有効性評価において、RCS法を使うことで、メンバーの特徴や得意分野を把握することができれば、レビューアの多様性確保の判断や、チームビルディングの手法等に応用するのが可能なのではないかという意見を得た。メンバーの多様性を高めると、レビュー品質の向上には寄与するが、コミュニケーションの難易度が上がる。両者のバランスを適切に保つことがポイントになると考えられる。

## 5. まとめ

### 5.1 結論

本研究では、レビューにおいて、レビューアから作成者に指摘の意図や期待が伝わらないのは、レビューアが作成者の価値観や考え方に沿わない伝え方をしているからであるという仮説を立てて、その解決方法として、コーチングで活用されているコミュニケーションスタイルをソフトウェア開発のレビューに応用する「RCS法（レビューコミュニケーションスタイル）」を提案した。

RCS法は、レビューコミュニケーションスタイルの簡易診断と、その診断結果を元にして、各スタイルのレビュー戦略や注意点を作成者とレビューアで共有する手法である。この手法を活用すると、レビューアが作成者を意識した指摘の伝え方をするようになり、作成者が指摘を前向きに受け止めて期待する行動を取ってくれる可能性が高いということを確認した。

### 5.2 今後の展開

ソフトウェア開発の現場で行われているレビューは必ずしも、1:1や対面とは限らず、多様化している（レビューアが複数、非対面、電話会議やWeb会議等）。また、RCSはプロジェクトの状況（緊急度や逼迫度、時間的な余裕）、レビューアや作成者の成果物に対する理解度、レビューの種類、レビューの進行状況や雰囲気、レビューアと作成者の立場や関係（上司、先輩、後輩、得意・不得意）、文化や慣習の違い（他国籍者）に応じて変化する。特に、他国籍者と推進するプロジェクトやオフショア開発は、今回構築したRCS法がそのまま適用できるとは限らない。RCS法を実際の現場で活用するには、これらの課題に対応していく必要があると考える。

## 参考文献

- [1] Karl E. Wiegers, 大久保 雅一「ピアレビュー」, 日経 BP 社, 2004
- [2] 三浦 剛史, 道上 宜宏, 藪田 里恵, 浅井 真「レビュー指摘の伝達において作成者の抵抗感を軽減する手法の提案」, SQiP 研究会 2016
- [3] NPO 法人 Health Coach Japan「コミュニケーションスタイル」
- [4] 森崎修司「間違いだらけの設計レビュー」, 日経 BP 社, 2013
- [5] 三森ゆりか「大学生・社会人のための言語技術トレーニング」, 大修館書店, 2013